

沖縄の「^{まぶに}摩文仁の丘」にみる戦死者表象のポリティクス
— 刻銘碑「^{いしじ}平和の礎」を巡る言説と実践の分析 —

北村 毅*

The Politics of Representation of the War dead:
An analysis of discourses and practices concerning the 'Cornerstone of Peace' in Okinawa

Tsuyoshi Kitamura

本論文は、沖縄県糸満市の「^{まぶに}摩文仁の丘」と呼ばれる戦跡空間を事例として、沖縄戦の戦死者表象を巡る記憶のポリティクスを考察するものである。本稿の目的は、まず、摩文仁の丘を巡って、沖縄戦の戦死者がどのように表象されてきたのかを明らかにすることである。とりわけ、1995年、摩文仁の丘の麓に建設された、約24万の戦死者の名が刻まれた記念碑、「^{いしじ}平和の礎」が分析の対象となる。その「^{いしじ}平和の礎」を巡る諸種の言説や実践を検証する作業を通して、〈戦後〉という時間的・認識的区分に表された、「想像の共同体」の外縁（外枠）を捉えることが、最終的な目的である。

第1章では、1960年代に始まる摩文仁の丘の上の慰霊塔群の「靖国化」と、丘の下の「^{いしじ}平和の礎」を巡る「靖国化」について検証した。第2章では、「〈平和〉のイメージネール」という概念を提唱した上で、丘の上と下の共通性について指摘し、第3章では、小泉純一郎首相を事例に、「^{いしじ}平和の礎」を「靖国なるもの」に接合するレトリックについて分析した。そして、第4章と第5章では、「^{いしじ}平和の礎」における、ある「^{いしじ}平和ガイド」の語りの実践に見出される、個々の戦死者を基点（起点）とする沖縄戦の想起の在り方に着目し、そこから、「〈平和〉のイメージネール」に規定された〈戦後〉を脱構築する可能性、ポスト〈戦後〉への布石を看取した。

キーワード：記念碑、戦死者、靖国化、平和の礎、摩文仁の丘

Mabuni Hill, where the Japanese military set up its final headquarters during the Battle of Okinawa, has been a symbolic memorial ever since the early postwar years. The entire region was designated as the Okinawa Peace Memorial Park by Okinawa Prefecture. The significance of the top of the hill is different from that of the bottom. The prefecture demarcated the top of the hill as *reiki*, i.e., a sacred space like the Yasukuni Shrine dedicated to the spirits of the war dead. On the other hand, the bottom of the hill was designated as a peace memorial. On the top of the hill, there are a lot of monuments erected by other prefectures and the National War Dead Peace Mausoleum, which contains the ashes of unknown soldiers and civilians. At the bottom of the hill, there are many facilities and spaces that are appropriate for a peace memorial. During the 1960s, many of the monuments on the top of the hill were erected in rapid succession. People termed this transformation of the landscape on the hilltop as "*Yasukuni-ka*" (*Yasukuni-ization*) in later years.

The most famous place in the peace memorial at the bottom of the hill is the Cornerstone of Peace, which was constructed by Okinawa Prefecture in 1995. The names of everyone who died during the war are inscribed on it-irrespective of their nationality or whether they were soldiers or civilians. Recently, it has been said that the peace memorial is on the verge of *Yasukuni-ization*. This circumstance is inseparably related to the earlier *Yasukuni-ization* of the hilltop.

The purpose of this study is to describe how the war dead of the Battle of Okinawa have been represented in Mabuni Hill. We explore our "imagined community" in the postwar time frame. The first question to be asked is why the phenomenon of *Yasukuni-ization* of Mabuni emerged during the 1960s. The second point to be considered is the *Yasukuni-ization* of the Cornerstone of Peace. Finally, we examine one peace-guide's actual narrative of the Battle of Okinawa in the Cornerstone of Peace. Based on the above mentioned analyses, we can suggest an alternative relationship between the war dead and us beyond the framework of the narrative of the nation-state of Japan.

Key words : Memorial, War Dead, Yasukuni-ization, Cornerstone of Peace, Mabuni Hill

1. はじめに

本論文は、沖縄県糸満市の「摩文仁の丘」と呼ばれる戦跡空間を事例として、沖縄戦の戦死者表象を巡る記憶のポリティクスを考察するものである。摩文仁の丘は、沖縄戦末期、最後に日本軍司令部が置かれたことで、戦後早くから、象徴的な慰霊空間並びに一大観光地となり、沖縄県内外から、観光客、遺族、平和学習の修学旅行生などが数多く訪れる場所となっている。

本稿の目的は、まず、摩文仁の丘において、沖縄戦の戦死者がどのように表象されてきたのかを明らかにすることである⁽¹⁾。とりわけ、1995年、摩文仁の丘の麓に建設された、約24万の沖縄戦など⁽²⁾による戦死者の名が刻まれた記念碑、「平和の礎」(以下、「礎」)⁽³⁾が分析の対象となる。その「礎」を巡る諸種の言説や実践を検証する作業を通して、〈戦後〉という時間的・認識的区分に表された、「想像の共同体」(アンダーソン 1997 [1991])の外縁(外枠)を捉えることが、最終的な目的である。

ここで、記念碑が、設置者——死者を代弁＝表象する存在——の陳述的(constative)かつ一方向的な意思表示ではないことを確認しておかなければなるまい。単なる当事者的権威の表現型として記念碑を捉えるだけでは不十分なのであって、アンダーソンがいうように、「一種の発話」として、つまり遂行的な(performative)何ものかとして見極めることが必要なのである。その観察において求められるのは、「何が話されているのか、また何故その発話の形式と内容は、そうした形をとるのかについて具体的に認識」することである(アンダーソン 1995: 249-250)。まさに、記念碑は、それ自体語っている。我々は、記念碑の声に耳を傾けなければならない。この観点からなされた研究として、フット(2002 [1997])、スターケン(2004 [1997])、米山(2005 [1999])、粟津(2006)、などが挙げられよう。

ところで、「礎」は、近年、「靖国化」と呼ばれる事態に晒されている。そもそも「礎」の「靖国化」とは、どのような事態を示しているのだろうか。本論では、この「靖国化」と表現される事象を手がかりとして、「平

和の礎」の「発話の形式と内容」についての考察が進められる。

まず、第1章では、1960年代に始まる摩文仁の丘の上の慰霊塔群の「靖国化」と、丘の下の「礎」を巡る「靖国化」について検証したい。第2章では、「〈平和〉のイメージール」という概念を提唱した上で、丘の上と下の共通性について指摘し、第3章では、小泉純一郎首相(当時)を事例に、「礎」を「靖国なるもの」に接合するレトリックについて分析する。そして、第4章と第5章では、「礎」における、ある「平和ガイド」⁽⁴⁾の語りの実践に見出される、個々の戦死者を基点(起点)とする沖縄戦の想起の在り方に着目し、そこから、日本の〈戦後〉を規定する「〈平和〉のイメージール」を脱構築する方途を見出したい。そこに、戦死者を「認識上の対象へと回収」する「ナショナルな語り」——「死者たちがいかなる国民として死んだのかということ」を表徴するインデックス——ではなく、富山一郎が「証言の領域」と呼んだ、生者と死者が「実践的な関係」を取り結ぶ語りの位置から(富山 1995: 89-95)、〈戦後〉を乗り越えるための、ひとつの示唆を得ることができよう。

2. 「摩文仁の丘」の「靖国化」

2-1. 丘の上の「靖国化」

「摩文仁の丘」は、丘の上と下で違う顔を持つ。この一帯は、「沖縄県平和祈念公園」の指定区域になっているが、実は、その性格は丘の上と下とで大きく異なる。少なくとも沖縄県の公式見解に基づけば、丘の上は、「霊域」として、丘の下は、「平和祈念」の空間として位置づけられている。丘の上には、各都道府県の慰霊塔や「国立沖縄戦没者墓苑」(以下、戦没者墓苑)が建ち並び、丘の下には、「平和」をその名前に冠する施設やスペースに満たされている。

1960年代、丘の上に立て続けに各県の慰霊塔が建立され、それぞれのお国自慢を競い合う様は、「慰霊塔コンクール」と嫌誦されたほどであった。後述するように、これら慰霊塔の碑文は、いずれも、「殉国者」や

「愛国者」を奉賛する調子に貫かれていたため、1970年代に入ると、この摩文仁の丘の変化は、「靖国化」と呼ばれるようになる。1974年、嶋津与志（大城将保）は、「摩文仁霊園は沖縄の靖国神社になりつつある」と指摘した。戦死者が、「英霊にたてまつられ、英霊の死がけっして無駄ではなかったと信じようとする心が偶像を形づくる」（嶋 1974：44）といった状況が、そこに呈されていたからである。

70年代末には、摩文仁の慰霊塔の碑文に「靖国の論理」が充溢しているとして批判の声が挙がった。140の慰霊塔の碑文を調査した「靖国神社国営化反対沖縄キリスト者連絡会」の報告書によって、1960年代に建てられた73基の慰霊塔の約57%（42基）が他県のものであり、その中で32県の慰霊塔（ほとんどが摩文仁の丘の上にある）の碑文が「戦争戦死の肯定讃美」「愛国憂国の心情」を含んでいるという指摘がなされ、反響を呼んだ（靖国神社国営化反対沖縄キリスト者連絡会 1983）。

一方で、丘の下が、「平和祈念」の空間として整えられていったのは、日本復帰を間近に控えた、1970年以後である。日本政府の補助金によって、雑草生い茂る荒地であった北側丘陵地に、参拝道、噴水広場、平和祈念広場等の各種公園施設などが設置され、「沖縄県平和祈念資料館」（1975年）や「沖縄平和祈念堂」（1978年）が建設された。1979年には、丘の上に、戦没者墓苑が厚生省によって建設され、18万余りの「無名戦没者」の遺骨が収骨された。この頃から、「霊域」は摩文仁の丘の上に隔離され、摩文仁の丘の北側に面する丘陵地帯は、平和祈念の空間としての相貌を整えていく。いわば、摩文仁の丘の上と下で、トポグラフィカルに「霊域」と「平和祈念」の空間の棲み分けが試みられていくわけである（北村 2006a）。

1990年代に入って、その傾向はさらに顕著になる。1995年には、丘の下に、「礎」が建設され、それ以後も「平和祈念」の空間を形づくる公園整備が漸進的に進められていった。

2-2. 丘の下の「靖国化」

「礎」は、大田昌秀知事の県政下（1990～98年）で進められた「沖縄国際平和創造の杜」構想⁶⁾の一環として、沖縄戦終結50周年を記念し、摩文仁の丘の麓に建設された。そこには、〈私たち〉の死者と〈彼ら〉の死者を選り分けた上で「合祀」する靖国神社のような追悼施設とは対照的に、沖縄戦における戦死者の個人名がすべて、軍人（軍属）・民間人、敵・味方、加害者・被害者、国籍といった区別（差別）がなく、刻銘されている。「礎」は、「自国の軍人軍属のみを対象とする」という『顕彰』の論理を否定し、悲惨な沖縄戦の記憶を静かだが強烈な平和のメッセージにつなげた（高橋 2005：225）追悼施設として、これまで内外から高い評価を受けてきた。

しかし、「礎」は、その刻銘基準ゆえに、建立当初から「靖国化」の危険性を憂慮されてきた。「礎」の除幕式（1995年6月23日）の直前に発表された論考、「戦没者刻銘碑〈平和の礎〉が意味するもの」において、「礎」の「刻銘検討委員会」の委員長を務めた石原昌家は、すでに建設中のこの時点で、「礎」が「靖国化」につながるのではないかと、という強い懸念の声が挙がっていることに触れている。

実際、同年3月に刊行された『けし風』において、新崎盛暉は、「礎」が、「国籍及び軍人、民間人を問わず」戦死者の名を刻むという理念に導かれた結果、「靖国合祀と似たような問題すら生じさせかねない」との危惧を表明している（新崎 1995：46-7）。そのような声に対して、石原は、「礎」と「平和博物館」（平和祈念資料館）をセットとして位置づけることによって回避できる憂慮であり、それでも、「靖国化」につながるならば、それは「国民の選択の問題」であると応じた（石原 1995：77）。

石原は、その建立前から、「礎」が、平和祈念資料館と連動してこそ、その「靖国化」を回避し得ると主張してきた。石原は、「礎」を訪れる人々は、資料館で「戦争がなぜ発生したのか、戦争指導者と民衆、戦時における加害者と被害者の関係」（石原 1995：76）等を

学ぶことによって補完されてはじめて、多様な戦死者の「戦死した理由」を知ることになるという。そのような「礎」の企画者たちの理念は、1997年11月に着工した、新しい「沖縄県平和祈念資料館」（以下、新資料館）の完成によって実現されるかにみえた。

しかし、1999年に発生した、新資料館の展示改ざん問題によって、その前途に大きな暗雲が立ち込めることとなる。稲嶺恵一県政下の行政担当者によって、「ガマでの惨劇」とキャプションのついたジオラマ——ガマ（自然洞窟）の中で日本兵が住民に銃剣を突きつけている構図——から、銃剣が取り外されようとしたのである。そこには、1998年の知事選挙で、前任の大田昌秀を破り就任した、稲嶺恵一知事の意向が強く働いていたと伝えられる。この戦時における軍隊と住民の関係を如実に示す「記憶の展示」に対する県当局の権力的介入は、後述するように、2000年代に入って急進する「礎」の「靖国化」の前触れともいえる出来事であった（cf. 新沖縄フォーラム編集運営委員会編 1999；沖縄県歴史教育者協議会編 1999；屋嘉比 2000；石原他 [編著] 2002；荒川 2006）。

2000年4月に開館した新資料館と「礎」の位置関係は、その理念を表して興味深い。「平和の火」を扇の要として、「礎」と新資料館が同心円状に配置されていることから明らかなように、両者はデザイン的にも「平和」の両翼を構成しているのである（図1参照）。まさに、新資料館が、「礎」の「靖国化」に対する防波堤として築かれたことが理解できよう。

しかし、両者の間に割り込むようにして、2001年1月、沖縄県は、旧資料館の屋外に展示されていた旧日本軍酸素魚雷や米軍戦車のキャタピラを最設置した（図1参照）。県内の研究者や有識者によって構成された、新資料館の「監修委員会」の委員による批判や、平和団体等による抗議行動にもかかわらず、これらの兵器は未だ同じ場所に展示されている（2006年6月現在）。新資料館は、ゼロ戦や人間魚雷などの兵器が多数展示されている、靖国神社の境内に併設された「遊就館」のような軍事博物館に対するアンチテーゼとして建設されたのにもかかわらず、稲嶺県政下で、当初の理念は篡奪されていった。

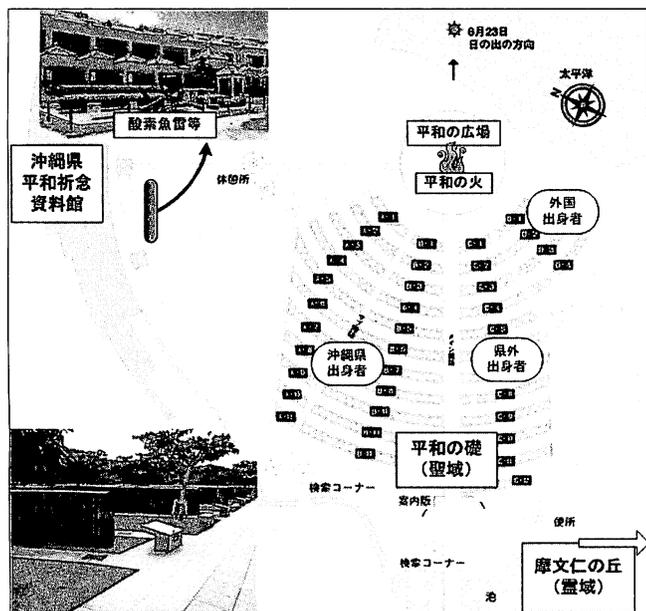


図1：「礎」と新資料館の配置図 [沖縄県平和・男女共同参画課のホームページに掲載の「平和の礎案内図」（1995年？）を元に筆者作成] ※左上の写真（2004年）は、資料館の前に展示された兵器（酸素魚雷等）。左下の写真（2003年）は、刻銘板が立ち並ぶ様子。いずれも、筆者撮影。

3. 「平和」と「繁栄」の物語

3-1. 〈平和〉のイメージ

ノーマ・フィールドは、「戦没者の尊い犠牲」があったがゆえに、今日の〈平和〉と〈繁栄〉がある」といった戦後日本のマスター・ナラティブを、「犠牲と平和と繁栄の三点セット」と呼んでいる（田中 1998：127）。8月15日の全国戦没者追悼式における首相の式辞には、毎年のようにこの「三点セット」が顔を出す、その一例を2003年の小泉純一郎首相の式辞にみてみよう。

私たちは、現在享受している平和と繁栄が、戦争によって心ならずも命を落とした方々の犠牲の上に築かれていることを、ひとときも忘れることはできません⁶⁾。

「心ならずも命を落とした方々の犠牲」のお陰で今の「平和」と「繁栄」がある。その論理を逆に読むと、

今の日本の「平和」も「繁栄」も、その「犠牲」がなければ存在しなかった、つまり、「戦死はく平和と繁栄」のために必要だった（高橋 2005b：19）ということになる。「三点セット」のレトリックは、高橋哲哉がいうように、「戦死が国家によって正当化される」（高橋 2005b：19）装置として機能しているのである。そのような装置が機能するもとは、果たして今の日本が、「基地の中にある」沖縄が、本当に平和なのかといった疑問が放たれることはない。さらには、「犠牲者」という言葉が使用されることで、「被害者」と「加害者」という対立項は隠蔽される。日本兵に虐殺された沖縄住民も、沖縄住民を虐殺した後で戦死した日本兵も、強制連行されたあげくに故郷から遠く離れた地で殺された「朝鮮人軍夫」も、等しく「平和」と「繁栄」のために死んだ「犠牲者」となってしまうのである。

高橋（2005b）は、「三点セット」のレトリックを「犠牲」という観点から分析したが、いふなればここでの議論は、このレトリックを「平和」という観点から検証しようとするものである。その作業のために、本稿では、アジア太平洋戦争における戦死者を「平和と繁栄の犠牲者」（＝礎）として表象する一定の作法を、「く平和」のイマジネール⁽⁷⁾と呼び、これを分析概念として用いる。これは、長くく戦後」を支配してきた観念であり、丘の上の「国の礎」の空間は、この「く平和」のイマジネール」というべきものに充溢されてきた。それでは、果たして、丘の下の平和の空間は、この「く平和」のイマジネール」とは無縁なのだろうか。次に検証してみよう。

3-2. 丘の上の慰霊塔の碑文

作家の安岡章太郎は、1968年に沖縄を訪れた際に書かれた評論において、摩文仁の丘の上の「記念碑のコンクリートの集積」に対する嫌悪感を露わにし、それらに、「ただ死者を語らせることによって自己の欲望を遂げようとする、人間のみぐるしさ」を感じ取っている。安岡は、そこで「この集団的記念碑は、まさに戦後の日本のエコノミック・アニマル的繁栄を記念した

もの」（安岡 1968：114）と喝破したが、まさしく摩文仁の丘の上に建つ各県の慰霊塔は、「日本の戦後の復興」が強調され、喧伝される場所であった。

敗戦によって失われた「日本人」としてのプライドや戦死者の「名誉」は、高度成長期の経済的復興によって、摩文仁という空間に、事後的に、屈折した形で回復されている。そこには、同時代に刊行された、林房雄の『大東亜戦争肯定論』（1964年）、『続・大東亜戦争肯定論』（1965年）にみられるような、敗戦によって「戦争責任者」（戦犯）となった戦死者を名誉ある「殉国者」へと復権させようとの意志が散見されるのである。林は、同書の中で、経済の復興と繁栄を裏づけとして、「戦後民主主義」の中で失われたと主張される「国民精神」の復活を唱道した。1970年に正・続を合本し出版された、同書の改訂版の中で、林はこう記している。

現在の世相をながめれば、「戦後二十年」はただ産業的、技術的復興にとどまり、精神の支柱はうちたてられていないように見える。たしかにまだ日本の柱とその上にひるがえる魂の旗は見えない。しかし、私は失望しない。廢墟を復活させたものは、ただ技術と科学だけではなく、どこまでも人間であり、日本人という人間の決意と活力と創造性であった（林 1970：740-41）。

そこでは、戦後の日本の「繁栄」と「平和」が、アジアで起こったふたつのアメリカ絡みの戦争——朝鮮戦争とベトナム戦争——による特需によって支えられていたことなどは、完全に忘失されている。林は、日本の経済的復興を免罪符のように活用して、日本の戦争責任（並びに戦後責任）を無罪放免にすることを試みたのであった。1960年代は、「経済成長に対する自信」に支えられて、一五年戦争の侵略性を否定し、特にアジア・太平洋戦争をアジア諸民族解放のための戦争として積極的に正当化する議論」が台頭した時期でもあった（吉田 1995：127-8）。摩文仁の慰霊塔の碑文には、

そのような繁栄と自己肯定のモードが露骨に反映されている。摩文仁の丘には、林のいうところの「魂の旗」が数多く掲げられた。

1965年4月に建立された、大阪府の「なにわの塔」（設置管理：大阪府遺族連合会）の碑文では、「奇蹟的復興を遂げえた郷土の現状」が、「諸霊が在天御加護の賜」とされ、「民族の歴史」の永遠性の顕彰と「人類恒久の平和」の祈念に結びつけられている。さらに、69年に付置された同塔の合祀碑では、70年にアジアで「はじめて」開催された大阪の万国博覧会が讃えられ、戦死者に対して「人類の進歩と調和」が祈願された。

以下は、三重県の「三重の塔」（設置管理：三重県）の碑文である。

嗚呼、国破れて山河あり人は逝いてその名をのこす

すぐる第二次世界大戦においてここ本土内激戦終焉の地沖繩に祖国の発展を祈りつつ草むす屍と化せられし勇士は申すに及ばず広く異国の山野にまた南海の孤島に玉の緒絶え給いし本県出身戦没者 5万有余⁽⁸⁾の勇士は三重の男の子の誇りを胸に秘めて祖国日本の守り神世界平和の礎となり給まう、その高く尊き勲は鈴鹿の山の嶺より高く五十鈴の川の流れ尽きざる如く末永く称えられん。(後略)

昭和40年6月（傍点引用者）

「国敗れて山河なしとは形容詞でもなく、まさしく戦後の沖繩の実態であった」（仲宗根 2002：272）と書いた仲宗根政善の、「山河」すら残らなかった沖繩県民の実感からは遠く離れて、三重の慰霊塔は、「国破れて山河あり」と「勇士」たちの功績を讃える。この主語なき碑文において、「祖国日本の守り神」と「世界平和の礎」とはあくまでも同義として表される。

3-3. 「難死の思想」

摩文仁の慰霊塔の碑文に散見される、殉国死を讃える観念は、小田実が『「難死」の思想』で論じた、戦後

日本の言説空間における「公状況」と「私状況」の解釈学と密接に関連している（小田 1991(1969)：3-40、以下、小田の文献からの引用が続くため、ページ数のみ記す）。小田のいう「公状況」とは、「大東亜共栄圏の理想」と「天皇陛下のために」というふたつの「公の大義名分」を基本とした、戦前の「日本国民のたいがい」が共有していた「自明の原理」である。対して、「私状況」とは、「言論の弾圧であり徴用であり飢えであり、戦場に駆り出されることであり、究極的には死ぬこと」（5）を意味する。

戦前の知識人は、このふたつの状況を結びつける接合の原理——「理念」と「ロマンティズム」——を必要とした（小田は、この原理を民衆は持たなかったという）。知識人は、「接着剤」の役割を果たす接合の原理をもってして、かろうじて「公状況」に「私状況」を接続させた。戦後、知識人は、破綻した戦前の「理念」と「ロマンティズム」に取って替わるものを切実に求めたが、それらはもはや知識人だけのものではなく、幅広く大衆化された、と小田は主張する。新しい接合の原理は、戦後無意味化された——「難死」した——戦死者の死に、新たな意味を充填させる（その有意味性を回復させる）ために用立てられたものであった。

小田は、戦後日本の言説空間において、「〈散華〉を〈散華〉として救い出すために」（9）試みられた方法として三つ挙げているが、ここではそれらの「集大成」たる第三の方途に注目しよう。それは、先の『大東亜戦争肯定論』に典型的にみられるような、「公状況」に再度、論理的意味を充填させるやり方である。つまり、「〈公状況〉の大義名分を類似のものとするり代えてしまうことである」（13）。その一例として、小田は、「大東亜共栄圏の理想」が「アジアの解放、独立」に、「天皇陛下のために」が「国家への忠誠」に置換される作用を挙げている（これは、そのまま靖国神社公認の歴史認識でもある）。

たしかに、摩文仁の丘の上では、このような置換作用が散見される。「東亜の〈平和〉」は、「世界平和」や「高度成長期の〈平和〉と〈繁栄〉」に、公の至上原理で

あった天皇陛下への忠誠は、以下のような碑文の文言にトランスレートされた。

1964年11月に建立された、茨城県の「茨城の塔」（設置管理：茨城県遺族連合会）の碑文では、「その尊い生命を国家の栄光の前に捧げた茨城県出身戦没者」の「諸霊の愛国の至情」が「範」として仰がれ、「国家永遠の隆昌と遺族の繁栄」の「加護」が祈願されている。66年9月に建立された、長崎県の「鎮魂長崎の塔」（設置管理：長崎県殉国慰霊奉賛会）の碑文では、「祖国日本の繁栄を念じつつ国難に殉ぜられた崇高な愛国のまごころ」が顕彰される。

摩文仁の丘の上では、かくして「公状況」に論理の意味が付与された。一方で、丘の下で行われたことは、こう考えられる。「平和の礎」とは、「私状況」に論理の意味を回復させる手だてだったのではなかろうか、と。その「靖国化」とは、「私状況」の側から、音もなくすり寄り、忍び寄り、気付かぬうちに「公状況」と結託しているといった事態なのではなかろうか、と。

摩文仁では、一見、戦死者の死の解釈は、丘の上（戦没者墓苑と各県慰霊塔）と丘の下（「礎」）で引き裂かれているように見える。丘の上では、数多の「難死」は、「殉国」「愛国」の代償としてかたちに表され、その下では、24万の「平和のため」の死者が黒御影石の質量でもって形象化されているのである。国のためか、平和のためか、いずれにせよ、死者は何らかの「犠牲者」として表象される道筋をつけられていることに注意しよう。摩文仁の丘の上にも下にも、「〈平和〉のイメージ」が介在していることがみてとれるのである。

3-4. 「礎」の欲望

確かに「礎」という場所は、「公状況」の無意味さ——沖縄戦でこんなにたくさんの方が死んだのだ——を教えてくれるが、「私状況」の無意味さについては何も語ってはいない。むしろ、「私状況」に意味を補填する場所となっている。ありとあらゆる沖縄戦の「犠牲者」が刻まれた「礎」では、「戦死者が現在の平和の礎石である」という新たな「理念」と「ロマンティズム」

が胚胎され、「国のために」死んだことは峻拒しつつも、「平和のために」死んだことは否定されない。そこは、「難死」を怖れている。つまり、「ただもう死にたくない死にたくない逃げまわっているうちに黒焦げになってしまった。いわば、虫ケラどもの死」（6）に直面することを怖れている。そこでは、死者たちはなべて「平和のため」の受難者であるという表象の陥穽に陥りやすい。

「礎」は、その理念を「去る沖縄戦で亡くなった国内外の20万余のすべての人々に追悼の意を表し、御霊を慰めるとともに、今日、平和を享受できる幸せと平和の尊さを再確認し、世界の恒久平和を祈念する」と説く（沖縄県 1993：1）。そこもまた、「平和のため」の戦死者が尊ばれる空間だ。たしかに、「礎」が、沖縄戦の全戦死者を対象としているのに対し、例えば、前掲の三重の慰霊塔は、自県の戦死者のみを対象としている点で、後者は狭隘な平和観に則っているとみることもできよう。さらにいえば、後者のいう「平和」とは、戦前の「東亜の平和」（自民族中心主義に縁取られた偏狭な「平和」観）の延長ないし、それとの連続のもとに打ち立てられている。しかし、それにもかかわらず、「礎」が標榜する「平和」の条理には、摩文仁の丘の上と同じように、戦死者が何のために死んだのかを語りた欲望が見出されるのである。

摩文仁の丘の上には、大城立裕が「魂魄之塔」（糸満市字米須）を表していったような「犬死にの塔」（大城 1977：56）は、ひとつも存在しない。摩文仁の丘の下の「礎」もまた、戦死者の死を意味づけたい人々の欲望を満たす装置となりかねない可能性を有する。摩文仁の丘という場所が上と下に棲み分けられているにせよ、そこで記念／祈念されるべき存在は、「国家」か「平和」か、何かのために死んでいった者たちである。ここでは、生き残った者は、「犬死に」の恐怖からひとたびの恩赦を得る。そして、途方もない人々が、何かのために命を投げ出させられた不可思議が、「純粋性の観念」（アンダーソン 1997 [1991]：237）のオブラートに包まれて納得の内に呑み込まれるのである。「礎」の

「靖国化」とは、そのような欲望につけ入り、忍び寄ってくるものなのではないだろうか。

4. 靖国一特攻会館—「礎」

4-1. 日米安保体制と「礎」

「礎」は、設立後、多くの要人を沖縄に引き寄せた。2000年7月21日には、沖縄サミットのため来沖したクリントン米大統領（当時）が、翌日の『沖縄タイムス』の社説が論説しているように「〈平和の礎〉を舞台装置として最大限に利用」して演説を行った。クリントン大統領は、敵味方の区別なくあらゆる戦死者の名前を刻んだ「礎」が、「強い人類愛を示している」と評価し、こう述べた。「過去五十年間、日米両政府は、礎の精神に基づいて、その責任を果たすために、同盟関係を維持してきた。そして、それによって、アジアの平和が守られてきたのである」（『沖縄タイムス』2000年7月22日）

ここに、「礎」が掲げた「平和」の理念は、軍事基地の存続によって保たれるとされる「アジアの平和」へと接続された。石原昌家がいうように、クリントン大統領が主張するところの「平和」は、「礎」に込められた「あらゆる戦争を否定し、軍事力を用いないで平和をつくるという意味をねじまげるもの」であり、「沖縄県民に引き続き米軍基地との共生を強いる」メタメッセージを内包するものに他ならない（石原 2003：117）。「礎の精神」は篡奪され（その持つ「私状況」は不可視化され、「公状況」が特化された）、基地の存在を容認し、正当化する「極東の平和」の論理にすり替えられたのである。「礎」は、日米安全保障条約という「公状況」を擁護するための、「接続点」として活用されたといえようか。

小泉純一郎首相も、2002年の「慰霊の日」（6月23日）⁹⁰の「沖縄全戦没者追悼式」での「あいさつ」で、「沖縄における米軍の存在はわが国のみならずアジア太平洋地域の平和と安定に大きく貢献している」（『沖縄タイムス』2002年6月24日）と発言し、同じ観念を日本政府も共有していることを露呈した。

「礎」建立後、慰霊の日の追悼式には、村山富市、森喜朗、小泉純一郎の歴代首相がのきなみ訪れているが、小泉首相は最も熱心で、2006年までの在任中、2003年を除いて5回も追悼式に参列した⁹¹。小泉首相は、就任直後、最初の靖国参拝に先だって、慰霊の日の追悼式に参列し、「礎」と戦没者墓苑を「参拝」した。追悼式では、「慰霊の日の六月二十三日は、八月十五日と並び先の大戦で犠牲となった人々の思いに心をいたし、世界の恒久平和を願う私たち日本人の心の原点でなければならない」（『沖縄タイムス』2001年6月23日）との「あいさつ」を読み上げた。慰霊の日は、首相が靖国参拝を企図していた8月15日と同様、「世界の恒久平和を願う私たち日本人の心の原点」（傍点は引用者）と目されたのである。

4-2. 小泉首相と「〈平和〉のイメージネール」

小泉首相が、なぜにこれほどまでに沖縄に熱心だったのかは、靖国神社参拝にかけていた情熱と同根の導因まで掘り下げることができよう。2001年6月25日の参議院決算委員会において、社民党の議員に、「摩文仁の丘の平和公園の礎と靖国神社は、首相にとって同じですか、違いますか。その歴史的意味をどう認識しておられるのでしょうか」と問われた小泉首相は、「沖縄と靖国神社という、地域的には違いますが、二度と戦争を起こしてはいけない、戦没者に哀悼の誠をささげるという気持ちにおいては共通のものがございまして」と答えた⁹²。2000年の6月23日の追悼式に参列した森喜朗首相が、同日午後名古屋で「国民を代表して英霊のみ霊に哀悼の意をささげて参りました」と演説した（『沖縄タイムス』6月24日）ことから分かるように、日本政府首脳はそこを靖国神社と類似の「戦没者追悼施設」として認識しているようだ。

2001年6月25日の参議院の「決算委員会」では、小泉首相は、その前々日の追悼式への初参加を踏まえ、「当時の敵も味方もともに追悼しようという意義ある式典だった」と評価している。そして、「今日の平和と繁栄というのはそういう先人のとうとい犠牲の上に成り

立っているんだと、戦争ほど悲惨なものはない、二度と戦争をしてはならないという気持ちを込めて靖国神社に参拝するつもりでございます」と参拝の意志を述べ⁽¹²⁾、8月15日の参拝は避けたにせよ、同年8月13日の参拝と相成った。

小泉首相が靖国参拝に掛ける情熱は、一見独自の感情的表明のように見えるが、その言辞は戦争語りのステレオタイプに満ちている。それは、紛れもなく、「〈平和〉のイメージ」に準拠したものであり、戦後日本の公式の戦争観の追認である。

首相は、就任前の2001年2月、その名に「平和」を冠する、鹿児島県知覧町の「知覧特攻平和会館」（以下、特攻会館）を訪れ、遺書や遺品、遺影などの展示物を見学した。語り部が、石川県出身の特攻隊員の遺書を「おかあさん、おかあさん」と読み上げた時、首相は大粒の涙をこぼしたという（『朝日新聞』2005年8月28日）。以後、首相にとってこの場所は、靖国神社に対するときの準拠点のようになる。

2001年5月21日の参議院予算委員会で、小泉首相は、自身をして靖国参拝へと促す動機について述べ、「特攻隊員」が自らの行動指針であることを明らかにした。

いまだに私は、嫌なことがあると、あの特攻隊員の気持ちになってみると自分に言い聞かしてみます。（略）今回、総理大臣を拜命した現在も、（略）あの方々の、特攻隊に乗り組んでいった青年たちの気持ちに比べれば、こんな苦労は何でもないという気持ちで立ち向かっているつもりでございます⁽¹³⁾。

ここには、首相の個人的な感懐として片づけられないものがある。特攻会館は、もうひとつの沖縄戦記念館としての側面を持っている。いわば、ここは、「沖縄決戦において特攻という人類史上類のない作戦」（同館）という、本土側からみた沖縄戦が展示されているといってもいいだろう。沖縄の平和祈念資料館同様、修学旅行のコースに組み込まれている特攻会館には、年間500校以上の修学旅行生が来館するという（宮本

2005：214）。同館のホームページの「趣旨」には、「〈平和〉のイメージ」が明確に示されている。

（前略）私たちは、特攻隊員たちの崇高な犠牲によって生かされ国は繁栄の道を進み、今日の平和日本があることに感謝し、特攻隊員のご遺徳を静かに回顧しながら、再び日本に特攻隊をつくってはならないという情念で、貴重な遺品や資料を（略）展示しています。／特攻隊員たちが帰らざる征途に臨んで念じたことは、再びこの国に平和と繁栄が甦ることであつたろうと思います。この地が特攻隊の出撃基地であつたことにかんがみ、雄々しく大空に散華された隊員の慰霊に努め、当時の真の姿、遺品、記録を後世に残し、恒久の平和を祈念することが基地住民の責務であろうと信じ、ここに平和会館を建立した次第であります⁽¹⁴⁾。

小泉首相は、この「特攻隊員たちの崇高な犠牲」を顕彰する場所と「礎」を同一のものとして、捉えていたのではなかろうか。

ここには、「平和の礎」という言葉が直接には使われていないにしても、戦死者と現在の「平和と繁栄」を直接に結びつける「理念」や「ロマンティシズム」（「難死の思想」に対する「散華の思想」）が充填されていることが読みとれる。そこには、「公状況」と「私状況」を結びつけようとする「〈平和〉のイメージ」が働いている。「公状況」（大状況）の中に動員され、文字通り「私状況」（小状況）を滅私された特攻隊員は、戦後、「公状況」を意義立てる手法を全く失った。彼らは、いわば「犬死に」（難死）と化した。そこに降って湧いたのが、高度成長期以降の日本の「平和」と「繁栄」という新たなる「公状況」であり、彼ら特攻隊員は、そこに（その実現に）奉仕したのだという物語によって掬い（救い）上げられたのである。

4-3. 「隠蔽記憶」

高度成長期に摩文仁を巡って露骨に展開された、戦

死者の死の意味の形象化は、ジクムント・フロイトの「隠蔽記憶」(スクリーン・メモリー)という概念を参照すると分かりやすい。マリタ・スターケン¹は、ベトナム戦争を巡る記憶のポリティクスについて論じた、『アメリカという記憶』において、フロイトのこの概念を参照して「ベトナム戦争記念碑」を分析した(スターケン 2004 [1997])。この概念の眼目は、過去の出来事が、映像として映写幕に投影されることにあるのではなく、スクリーン自体が一種の遮蔽幕として機能することにある。つまり、重要な記憶Aを「隠蔽」するために、記憶Bが、記憶Aを^{スクリーン・アウト}遮蔽するのである。

例えば、「戦死者=犠牲者」というレトリックによって、我々は、加害者と被害者という対立、あるいはそこに収まることのできない両義的な存在に思い至る回路を閉ざされてきたのである。高度成長期というスクリーンに映し出された、〈私たち〉の「平和」と「繁栄」の自画像、そしてそこで醸成された「散華の思想」、すなわち、「犠牲の論理」「犠牲のレトリック」(高橋 2005b)こそが、我々をして無数の「難死」と向き合うことをできなくさせる隠蔽記憶であった。

それでは、我々は、無数の「難死」と出会い直すためにどうしたらいいのであろうか。「礎」において、国家のための戦死者という集合的・抽象的観念ではなく、個々の具体的相貌を持った死者に、我々は出会うことができるのだろうか。すなわち、無数の沖縄戦における「難死」を、「平和」と「繁栄」という「公状況」に接合しているイマジネールを脱構築していくことができるのか、ということである。次に、ポスト〈戦後〉の可能性も含みつつ考察してみよう。

5. 「平和の礎」は語る

5-1. 「礎」の存在証明

石原昌家は、その論考において、本来ならば、「人間に、二度と戦争を起こさせない、戦争に参加させない最善の方法は、過去の大量虐殺の場となった戦場をそのまま残しておくことである」と述べている(石原 2002: 318-21)。

実際、ナチスによって破壊されたフランスのリモージュ郊外にあるオラドゥール村には「大量虐殺の場となった戦場」がそのまま残されているが、惨劇の舞台を永久に手つかずに保存することは、大いなる反戦・平和の礎石となるだろう。しかし、石原もいうように、そういった手法が全ての場合で有効であるはずもない。「戦場」(=戦争遺跡)の現状保存はともかく、遺骸(遺骨)をそのままに晒しておくことは、遺族感情からしても当然許されない。「礎」は、「それに変わる一つの方法」として示された²と、石原はいう。

戦没した具体的個人の存在を現す名前を一同に刻めば、少なくとも戦争犠牲者数の抽象的数字がより具体的にみえてくる。あとは、個々人の想像力、感性与理性の問題となる。あるひとにとっては、その名前が戦場に累々と横たわる遺体、遺骨に見えてくるはずである(320)。

石原は、「礎」の存在証明を、「戦場に累々と横たわる遺体、遺骨」の代替的措置として表す。石原にとって、「二〇数万人の全戦死者の氏名が刻まれた刻名版は、戦場に累々と横たわっていたはずの遺骸を示す代替」(石原 1995: 75)なのである。敗戦後の戦跡空間に横たわる死者の生々しい痕跡の代わりに、黒御影石の石版に刻まれた名が、新たな死者の痕跡として選ばれたのである。

このことは、「礎」の原義といってもいいだろう。まさしく、「戦場をそのまま残しておくこと」の代替案として、「礎」は建立された。そこは、「24万人の名前」(事象A)を、「戦場に累々と横たわる遺体、遺骨」(事象B)に結びつける、換喩的想像力が要請される場所である。換喩とは、事象Aを利用して、それとなんらかの関係を結んでいる(つまり隣接する)事象Bを指示することであるが、問題は、両者を結ぶ「なんらかの関係」である(野内 2002: 59)。

石原は、私がいうところの換喩的想像力の事例として、「礎」を訪れて「亡くなったひとをいたわるように

その名前を指先でなぞっているひと」(＝遺族)を挙げている。とはいえ、そのような想像力の発動は、死者の身体を直接に知る者に限られる。確かに遺族は、戦死者の身体や血のつながりという「なんらかの関係」を介して、その換喩的想像力を働かせることができる。死者の係累は、目の前に刻まれた名を通して、その個的な死の状況に思いを馳せるのであろう。

しかし、「礎」を訪れるほとんどの者は、そういった媒介項としての身体性を有しない。では、彼らにとって、24万の戦死者の名前は、ただの記号の羅列にしか映っていないのだろうか。今後ますます、「礎」に刻まれた名前に疎遠・無縁な人々が増えて行くにつれ、そこはただの記号の加算としてのみインパクトを与える場所となってしまふのだろうか。

いや、換喩的想像力は、遺族だけに開かれたものではない。様々な「なんらかの関係」を介して、戦死者へとつながる経路を設定できる。新資料館の展示企画にも携わった大城将保は、「〈平和の礎〉のもつ意味は、現場に立って、自分の感性で感受するしかない」という。大城は、「礎」が「純粹にシンボル化されたからこそ普遍的な価値をもちうる」と述べ、「単なる一個人間存在をしめす記号としての〈名前〉にしぼって刻んだからこそ、観る者にさまざまな想像や解釈を許してくれる」とその意義を示した(新崎他 1997: 134)。「礎」が、「名」という記号の羅列であるからこそ、そこは、あらゆる「感性」とイマジネーションの、すなわち換喩的想像力の母胎となりうるのである。

次節で、「沖縄平和ネットワーク」(以下、平和ネットワーク)⁽¹⁵⁾の平和ガイド、野口正俊による「礎」での語りの実践の中に、換喩的想像力の実例をみてみることにしよう。それは、「礎」の「靖国化」をもたらす、「〈平和〉のイマジネール」の強烈な吸引力から免れようとするひとつの試みでもある。そこに「〈平和〉のイマジネール」に自縛された〈戦後〉を超克する可能性、ポスト〈戦後〉への布石を看取したい。

5-2. ある「平和ガイド」にとっての「礎」

野口正俊(1936年・香川県生まれ)の父初夫は、沖縄戦で亡くなっている⁽¹⁶⁾。野口は、8歳の時に父を失った、いわゆる「戦争遺児」(野口が自分をそう呼ぶことはない)である。しかし、野口は、日本遺族会青年部に入ることはなく、家族を亡くした「センチメンタル」に膠着しがちな遺族の在り方に対して、一定の理解を示しながらも距離を置いてきた。野口は、2004年1月に徳島から沖縄に移住し、同年沖縄で開かれた「平和ガイド養成講座」⁽¹⁷⁾を受講し、11月より「沖縄平和ネットワーク」の平和ガイドとして活動している。

ガイドとしての経歴は数年だが、野口と沖縄のつながりは深く長い。1968年4月、当時徳島で沖縄の「祖国復帰運動」に携わっていた野口は、「祖国復帰要求行進」に参加するため初めて沖縄に来た。行進の合間を縫って、父が最期を遂げたと推測される「山雨の塔」を訪れ、その下のガマ(自然洞窟)を覗いた⁽¹⁸⁾。そのとき彼は32歳で、父が死んだ年齢と同じだった。野口は、父親がどんな気持ちで死んでいったのかを確かめようと訪沖したのである。

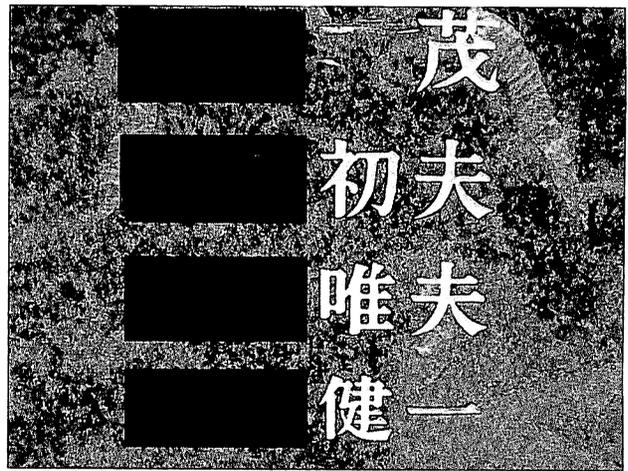


写真1：父「初夫」の刻銘 [2005年6月筆者撮影]

野口にとって、「礎」は「死の再確認の場所」である。1995年、彼は勤務先の徳島のテレビ局の「戦後50周年企画」として、7家族16名の沖縄戦の「遺家族」を引き連れて、「礎」の除幕式に参列した。その時、「礎」に刻銘された父の名を見つけた野口は、プライベートカメラで、父の名前を撮そうとした(写真1参照)。その時の心情は、2006年2月15日の滋賀県の中学校の修学

旅行生を対象とした「礎」のガイドで、こう語られた。

そしたらね、そのファインダーの中が揺れるんです。脇をしめてるのと思ったんですけど、揺れる。それで気がつくんです、胸の揺らぎに。脇をしめてるから、逆に揺らぐんです。なぜ胸が揺らぐのか、その理由に気づいて、僕は愕然とするんだけど、やっぱり親父は死んでたか、ということなんです。

父が「100%死んでいる」ことを確信していたのにもかかわらず、「どこかでそれまで生きてるかも分からないということは何%か心に秘めてた」自分自身に気づき、野口はその場に呆然と立ち竦む。そのとき、野口は、父が本当に死んでいることを「再確認」したという。野口は、帰りのバスの中で、他の遺家族も、父や夫や兄が「どこかで生きていたのではないか」という感情を「50年間胸に押し込めたまま生きていた」ことを知る。ある遺家族は、「徳島慰霊団」の記念文集に、『父はもう帰ってこないのだ、やっぱり亡くなっていたのだ』と指でなぞり、手で確かめる礎の名前は、五十年経って受け取る、戦死公報のようで（沖縄「平和の礎」徳島の会編 1995）あったと書いているが、野口はその言葉に共感する。

同文集には、「紙きれ一枚」でもたらされた死の知らせを受け入れることができず、「どこかで元気ではないかという思い」「（いつか逢えるかもしれない）という淡い期待」を抱えて戦後を歩んできた、遺家族の思いが書き連ねられている。多くの遺家族が、「二度目の戦死公報」をもたらされたことによって、完全に死者を死者として認知することが可能になった。野口は、遺家族たちと共有した胸の「揺らぎ」という身体感覚を原点として、この場所を「死の再確認の場所」と位置づけるのである。

野口は平和ガイドを始めた当初、父が沖縄で戦死していることに触れなくなかったという。しかし、「ウチナンチュ」（沖縄の人）から戦争の話を知りたいという聞き手の期待に背いて、徳島育ちの「ヤマトンチュ」

（大和の人）がここにいるからには、自分がなぜここにいるのかを措いて話ができないと考えを改めた。否が応でも、「礎」の前に立てば、そこに刻まれた父の名前について語らざるを得ない。野口は、平和ガイドとして、自身の独特のポジショナリティを特権化することに「後ろめたさ」を感じつつも、それが自らの準拠点であることを「迷い」のままに聞き手に示す。

彼は、「斬込み」に行く日本兵が住民の食糧を強奪したという証言に接するたびに、もしかして自分の父親がやったかもしれないという想念に強く囚われるという。父の戦友からの手紙によれば、父は、1945年6月20日頃、最後の斬込みに出掛け消息を絶った。6月20日は、日本兵による住民に対する食糧強奪が頻発した時期に重なる。野口には、住民の証言に示された状況と斬込みに行く父の姿が二重写しになり、リアルに戦場の様相が浮かび上がる。父の加害への想像力が、野口をして遺族のセンチメンタリズムから解き放っているのである。

5-3. 空白に語らせる

野口は、父の死は、「犬死に」だったと明言する。しかし、それは、肯定的な意味合いを持っている。野口は、祖国に殉じた「尊い死」が、現在の「平和」と「繁栄」の礎になったというマスター・ナラティブに背を向ける。

ノーマ・フィールドは、「犠牲と平和と繁栄の三点セット」の「三点の因果関係は曖昧にして強力な忘却の働きを果たしている」と指摘した（田中 1998：126-7）。この「三点セット」の物語の主語は、常に「日本人」であり、その枠から排除された「アジアの人たち」に対する加害の忘却をもたらしてきたのである。

たしかに、「礎」は、あらゆる戦死者が刻銘の対象となる「死の前の平等性」を標榜する。しかし、「戦争の歴史の真実を記録する」という理念を受け入れられず、加害者と一緒の場所に名を刻まれることを頑と拒否する、一万数千人といわれる死者の遺族がいることを忘れてはならない。沖縄戦では、朝鮮半島から連行され

ます。ほんやりと普天間アサ一家の姿が浮かび上がります（以下、2006年2月15日のガイドより）。

「戦場に累々と横たわる遺体、遺骨」はもうないが、代わりに我々の前には24万の名が残された。野口は、換喩的な想像力を巡らせて、名前という痕跡から「普天間アサ」一家の物語を紡ぎ出す。「普天間アサ」一家についての情報は極端に少ない。いつ、どこで亡くなったかも定かではない。千原には、同じように一家が全滅した世帯が6戸もあった。千原の総世帯数45戸の実に13.3%にあたる⁽²¹⁾。野口は、もうひとつの手がかりとして、同じ字の中の、同族と思われる同姓の刻銘者に目を向ける。

同じ字の中に、普天間さんという方は、40人いるんですけど、普天間さんといったらほぼ間違いなく一族です。（略）一族とおぼしき人たちのデータをぜんぶ引っ張り出しました。そこから、この一族が、戦争の時にどういうふうに移動していったか、だいたい読めるわけです。この40人の普天間さんの中で、西原町で亡くなったのは、二人しかいません。その他、一人が中国戦線で亡くなって、一人が金武というところで亡くなっていますから、この方は戦後収容所で亡くなったと思われます。だから、全部で36人が、南部へ避難する途中で亡くなっているわけですね。最終的には、真壁というところで13人が死ん

表1：西原町千原「普天間」姓の「平和の礎」刻銘者40人の死亡時期と場所（野口正俊氏提供の資料より筆者作成）

死亡時期		死亡場所	死亡者数	
4月	18日	西原	2人	5人
	25日	東風平	3人	
5月	？日	大里	2人	2人
6月	？日	大里	3人	19人
	？日	摩文仁	2人	
	？日	具志頭	1人	
	6月8日～20日	真壁	13人	
不明			12人	
その他（中国戦線、金武）			2人	

でいます。そこが一番多いです。それにいたるまでの経路の中で、3人亡くなったり、5人亡くなったりしています。そこから、この一族がどの経路を辿って、一番たくさん亡くなった真壁へ到達したのか推測がつかます。

語り手は、「普天間アサ、西原町千原、明治生まれ、死亡場所不明」といった情報の断片から、彼女とその家族、そして一族が戦場をどのように逃げまどったかをトレースする。表1に示されているように、千原の普天間姓の人々の多くが、5月下旬の第32軍司令部の南部撤退後、南へ南へと追いやられていった先々で、また一人また一人と戦禍の中に斃れていった。一塊の名前から、多くの住民を巻き添えにした戦場の光景が浮かび上がってくる。そして、野口は、真壁という場所に、彼らと自身の父親の接点を見出す。

真壁は、ぼくの父親が亡くなったと思われるところです。そこで、ぼくの父親とこの住民との接点が生まれます。当時日本兵がどんなことをしたか、ぼくはこちらに来て、いろんなガマにもぐって勉強しました。ガマの中で、軍隊が使うからと言って日本兵が住民を追い出す。追い出されたら、地上は、艦砲射撃、爆撃、迫撃砲、機関銃弾、小銃弾が飛び交うところだから、14歳以下の90%が壕から追い出されたことによって死んだというデータもあります。ガマの中で虐殺するケースがいくつもあります。さらには、食糧を強奪する、沖縄の方言を喋っただけで、スパイとみなして処刑しているケースもいくつもあります。そういうことは軍が命令しています。そういうことが、最終盤の真壁ではあったんだろう、その一端をぼくの父親が担ったかも分からない……という接点が真壁なんです。

名というひとつの痕跡から、沖縄戦における住民の典型的な戦場体験が浮かびあがる。野口があくまでもこだわるのは、彼らが何のために——国のために、平

和と繁栄のために——死んだのかではなく、どのように死んだのかということである。彼らの死への道程を共に歩く、死者の／死者についての記憶を分有する場所として、「礎」は立ち現れる。

これは、先にみたような、「鬼気せまる国民的想像力 (ghostly national imaginings)」(アンダーソン 1997 [1991]: 32) に満たされた、〈私たち〉の死者を創り出そうとする政治とは限りなく迂遠な、死者を記憶する在り方である。テッサ・モーリス＝スズキのいう「死んだ者が持つかけがえのない多様さとともに、それらの人々を記憶しよう」(モーリス＝スズキ 2001: 43) とする営為に他ならない。そのような想起の在り方を支えるのが、換喩的想像力なのである。換喩的想像力を働かせることによって、「礎」は、単なる見知らぬ名前の集合から、無数の死への動(導)線を張り巡らせた記憶の器として立ち上がる。「礎」が、語り始めるのである。換喩的想像力をもってして、我々は、「記念碑・記念館の建立という国家の、あるいは集団の歴史的表象化の作業に決して収めることのできない、いや、収められることを拒絶する無数の死者たち」(子安 2003: 294) と向き合うことができる。

野口は、「一族意識が非常に強い」沖縄で、一家全滅した家族が出たことによって、生き残った一族が深い悲しみにうち拉がれてきたことについて触れ、「礎」のもうひとつの機能について言及する。

自分たちが生きている間は、普天間アサさんの一家が存在したことは覚えておける。だけど、自分たちがこの世の中からいなくなったら消えてしまう。でも、こんなふうに刻まれたら、ずっと覚えていける。子孫にも伝えていける。そのことで喜ぶ。かなしい喜び方だね。(略) ここは、(特に、一家全滅家族を出した一族にとって) 生を再確認——生きてたことを再確認する場所でもあるんです。

野口にとって、「礎」とは、「死を再確認」と共に、「生を再確認」する場所でもある。そこは、死者が、

かつて「生きていたこと」、今はもう「死んでいること」、その両方を再確認することのできる場所なのである。最後に、野口は、自身の好きな言葉であるという「履歴」を挙げ、それを「個人的な歴史」と言い換えて、聞き手に次のような想像力を要請した。

普天間アサの個人的な歴史は、沖縄戦があったためにここで断ち切られたんですよ。ここらに刻まれている人たちぜんぶ、それぞれ個人的な歴史を持っていたんです。死にいたるまでの歴史、それから沖縄戦がなくて生きていたら、いろんなことをしたかったと思う人たちの歴史が、沖縄戦があったために、ぜんぶ断ち切られた。ここらの名前ぜんぶですよ。その数、およそ24万。沖縄戦があったことで、24万の人がその歴史を断ち切られて、それから以後の歴史はぜんぶなくなる。それを考えてみませんか。戦争ってそんなものですよ。そんな戦争がなぜ起きたのか、どうやったら戦争を止めることができるのか考えることを、ここからはじめて欲しい。(略) 平和って考えたり祈ったりすることだけじゃなくて、実践すること、何かすることによって、はじめて勝ち取れるんだって、しゃにむに信じて自分なりの方法をみつけて欲しい。

24万人の「履歴」(個人的な歴史)を断ち切られた人々の存在が喚起され、聞き手に無限の想像力が要請される。「〈平和〉のイマジネール」が有する饒舌さや「崇高」なる響きはここにはない。それを乗り越えようとする先には、「散華の精神」から最も遠い「難死」の哲学がやさしく張り巡らされている。「崇高」とは対極にある無惨な死の数々が、名前さえ残らなかった非業の存在の数々が、「礎」からそっと立ち上がる。『天皇の逝く国で』で、ノーマ・フィールドがいったように、「その死をむだにさせない唯一の道は、あれらの生命がどのように浪費されたか、認識すること」だけなのだ(フィールド 1994: 105)。このような試みの連なりこそが、「平和の礎」を「靖国なるもの」に取り込まれな

いたための抵抗の「礎」、新たなる平和の「礎」とするの
である。

6. おわりに—〈戦後〉からの出口

野口のいう「歴史」とは、単なる過去形としてのそれではない。「沖縄戦がなくて生きていたら、いろんなことをしたかったと思う人たちの歴史」という、可能態としての「歴史」を含むものである。それは、ヴァルター・ベンヤミンがいうところの「ヒストリカル・マテリアリズム」に他ならない。米山リサによる、ベンヤミンの「歴史の哲学に関するテーゼ」についての解説を引用すれば、「解釈学的な歴史主義や既成のマルクス主義的歴史学においては、歴史の真実は永遠に過去に内在していると考えられるのに対し、ヒストリカル・マテリアリズムの手法では、過去の真実のイメージは現在と過去との弁証法的な対話のなかで、ほんの一瞬、現れるにすぎないものとして想定される」（米山1998：239）。そして、後者にとって肝要なのは、「危機の瞬間にひらめくような回想を捉える」（ベンヤミン2000：60）ことである。無数の死者の可能態としての「歴史」を前にして立ちすくむ地点こそが、野口が「ここからはじめて欲しい」と語りかける「いま—こそ—その—とき（Jetztzeit）」（ベンヤミン）なのではないだろうか。ここに、米山のいう「過去の出来事を現在にとって極めて切迫した問題関心とかえてゆくような、記憶の弁証法としての社会実践」を看取することができる（米山1998：239）。

それこそが、〈戦後〉という「均質で空虚な時間」（ベンヤミン2000：74）に満たされた迷宮から、あり得たかもしれない可能性—24万の（失われなかった）生に満たされた世界—の光のもとに、死者を救済・解放するアリアドネの糸なのである。

【付記】

本稿は、先に発表した博士論文（2006a）の第3章を加筆・修正したものである。なお、本論文は、「トヨタ財団2004年度研究助成」（「沖縄戦の語りにもみる平和教育への実践的アプローチ〈ガンマ〉における〈平和ガイド〉の実践を事例として」；助成番号：D04-A-269）に基づく、研究成果の一部である。ここに記し

て、お礼申し上げます。

注

- (1) 沖縄戦の記憶や戦死者表象に関する先行研究は多数あるため、ここでは、本稿と問題意識を共有するもののみ、以下にいくつか挙げておきたい。富山（1995）、屋嘉比収（2000）、磯田（2001）、佐藤（2003）、洪（2005）、など。
- (2) 「沖縄県出身の戦没者」に関しては、「満州事変に始まる15年戦争の期間中に、県内外において戦争が原因で死亡した者」も刻銘対象となるため、「沖縄戦など」と付記した。
- (3) 「礎」に関する論考として、以下を参照のこと。石原（1995；2002；2003）、屋嘉比（2002）、宮菌（2002）。
- (4) 「平和ガイド」とは、本土から沖縄を訪れる修学旅行生を主な対象として、戦跡や基地を案内し、平和学習のサポートをする人々ないし実践の総称である。
- (5) 以下の四つの理念を柱として推進された。①「恒久平和の希求」、②「戦没者の追悼」、③国際平和の交流、④平和文化の創造。
- (6) 首相官邸ウェブページより。
(<http://www.kantei.go.jp/jp/koizumispeech/2003/08/15sikiji.html>)
- (7) 「イマジネール」とは、集合的アイデンティティの核となる記憶を構築する、社会的・文化的な想像力と理解されたい。その概念規定について、詳しくは、北村（2006a）を参照のこと。
- (8) この「5万有余」は、同県の「沖縄戦戦没者」だけでなく、「南方諸地域戦没者」を含む数字である。
- (9) 1962年より実施された、沖縄戦の「終戦」（日本軍の組織的戦闘の終結）を記念し、その戦死者を慰霊する日。1962年から64年までは、6月22日であったが、1965年以降6月23日となって今に到る。同日には、様々な追悼行事やイベントが行われるが、中でも、1964年より、摩文仁において開催されてきた、琉球政府（沖縄県）主催の「戦没者追悼式」が有名である。
- (10) それ以前に慰霊の日の沖縄を訪れた首相は、1990年の海部俊樹のみである。小淵恵三は、「沖縄問題」に最も熱心だったが、急逝したため参列を見なかった。橋本龍太郎首相は、日本遺族会の会長も務め、最も「遺族問題」に熱心な首相であったが、在任中は一度も、表向きは所用が重なり参列できなかった。
- (11) 国会会議録検索システムより。
(http://kokkai.ndl.go.jp/KENSAKU/swk_startup.html)
- (12) 同上。
- (13) 同上。
- (14) 知覧特攻平和会館のホームページより。
(<http://www.town.chiran.kagoshima.jp/cgi-bin/hpViewContents.cgi?pID=20041215091804>)
- (15) 沖縄県内の平和ガイド派遣団体のひとつであり、「戦争を否定する立場で、沖縄戦の実相を学び、軍事基地の実態をとらえ、伝える。そのために、お互いに学びあい、情報を交

- 換する。沖縄県内外の平和学習を支援し、平和を願う沖縄の心を伝え、平和創造に寄与すること(会則第3条)を目的とする。同会の平和ガイドは、20代から70代まで幅広い世代によって構成されている(平均40代)。その内、約3割が県外出身者である。同ネットワークについて、詳しくは、北村(2006b)を参照のこと。
- (16) 以下の野口正俊に関する既述は、2005年3月11日に行ったインタビューに基づく。
- (17) 「沖縄平和ネットワーク」は、平和ガイドを要請する市民講座を、2003年より度々開催している。
- (18) 野口の父は、第24師団89連隊通信中隊に所属していた。
- (19) 朝鮮半島出身刻銘者の調査は、韓国明知大学の洪鍾泌教授の手によって進められたが、その経緯は土江(2005)に詳しい。
- (20) 「普天間アサ」の刻銘は、西原町には、字千原と字棚原の2箇所にある。北村(2006a)において紹介した「普天間アサ」は、棚原の当該人物である。ただし、写真は、誤って千原の「普天間アサ」を掲載した。ここに記して訂正したい。本稿における「普天間アサ」は、個人データ・写真共に、千原のケースである。
- (21) 千原の総世帯人員254人の内、116人が戦死した。死亡率は、45.7%、およそ二人に一人が戦死したことになる。字民の多くは、本島南部(島尻)への避難途中で戦死した。生存者は、1945年6月下旬頃、本島最南端の真壁一帯で捕虜となった(西原町史編纂委員会編1987:244-55)。
- (野村修訳)『ベンヤミン「歴史哲学テーゼ」精読』(今村仁司著),岩波現代文庫:51-83.
- フィールド, N., 1994[1991], 『天皇の逝く国で』(大島かおり訳), みすず書房 (*In the realm of a dying emperor*, New York: Pantheon Books.)
- フット, K・E., 2002[1997], 『記念碑の語るアメリカ 暴力と追悼の風景』(和田光弘他訳) 名古屋大学出版会 (*Shadowed Ground: America's Landscapes of Violence and Tragedy*, Austin: University of Texas Press.)
- 林房雄, 1970, 『大東亜戦争肯定論 改訂版』番町書房.
- 洪珮伸, 2005, 「沖縄から広がる戦後思想の可能性—戦場における女性の体験を通じて」(大越愛子他編著)『戦後思想のポリティクス』青弓社: 111-145.
- 石原昌家, 1995, 「戦没者刻銘碑〈平和の礎〉が意味するもの」『季刊戦争責任研究』8, 日本の戦争責任資料センター: 74-7.
- 石原昌家, 2002, 「沖縄県平和祈念資料館と〈平和の礎〉の意味するもの」『争点・沖縄戦の記憶』社会評論社: 308-23.
- 石原昌家, 2003, 「全戦没者刻銘碑〈平和の礎〉の本来の位置付けと変質化の動き」『国立追悼施設を考える』樹花舎: 107-19.
- 石原昌家・大城将保他(編著), 2002, 『争点・沖縄戦の記憶』社会評論社.
- 磯田和秀, 2001, 「記憶の生々しさについて 沖縄戦を想起するふたつの方法」『史苑』61(2), 立教大学史学会: 70-99.
- 北村毅, 2006a, 「〈沖縄戦〉後のエスノグラフィ 痕跡と記憶の戦跡空間」早稲田大学人間科学研究科(博士学位論文).
- 北村毅, 2006b, 「〈戦争〉と〈平和〉の語られ方; 〈平和ガイド〉による沖縄戦の語りを事例として」『人間科学研究』19(2), 早稲田大学人間科学学術院: 55-73.
- 子安宣邦, 2003, 『日本近代思想批判 一国知の成立』岩波現代文庫.
- 九州弁護士会連合会編, 1992, 『日本の戦後処理を問う—復帰二十年の沖縄から—』九州弁護士会連合会.
- 宮本雅史, 2005, 『「特攻」と遺族の戦後』角川書店.
- 宮園衛, 2002, 「〈平和の礎〉にみる国境を超える〈戦争の記憶〉の仕方(1) —〈人間としてのアイデンティティ〉形成の可能性—」『新潟大学教育人間科学部紀要』4(2), 新潟大学教育人間科学部: 273-298.
- モーリス＝スズキ, T., 2001, 「記憶と記念の強迫に抗して」『世界』(本橋哲也訳), 693, 岩波書店: 34-43.
- 仲宗根政善, 2002, 『ひめゆりと生きて』琉球新報社.
- 西原町史編纂委員会編, 1987, 『西原町史』(第三巻資料編二西原の戦時記録) 西原町役場.
- 野内良三, 2002, 『レトリック入門 修辞と論証』世界思想社.
- 小田実, 1991(1969), 『「難死」の思想』同時代ライブラリー.
- 沖縄「平和の礎」徳島の会編, 1995, 『祈り』私家本(野口正俊氏提供).
- 沖縄県, 1993, 『「平和の礎」建設基本計画書』沖縄県.
- 沖縄県歴史教育者協議会編, 1999, 『歴史と実践(平和祈念資料館問題特集)』20, 沖縄県歴史教育者協議会.

引用・参考文献

- アンダーソン, B., 1995[1990], 『言葉と権力 インドネシアの政治文化探求』(中島成久訳) 日本エディタースクール出版部. (*Language and Power, Exploring Political Cultures in Indonesia*, Ithaca; Cornell University Press.)
- アンダーソン, B., 1997[1991], 『増補 想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』(白石さや・白石隆訳) NTT出版. (*Imagined communities: reflections on the origin and spread of nationalism*, London; New York: Verso.)
- 荒川章二, 2006, 「新沖縄県平和祈念資料館設立をめぐる」『国立歴史民俗博物館研究報告 近代日本の兵士に関する諸問題の研究』126, 国立歴史民俗博物館: 133-189.
- 新崎盛暉, 1995, 「〈平和の礎〉問題を考える」『けーし風』6, 沖縄フォーラム刊行会議: 46-7.
- 新崎盛暉他, 1997, 『第三版 観光コースでない沖縄』高文研.
- 粟津賢太, 2006, 「集合的記憶のポリティクス 沖縄におけるアジア太平洋戦争後の戦没者記念施設を中心に」『国立歴史民俗博物館研究報告 近代日本の兵士に関する諸問題の研究』126, 国立歴史民俗博物館: 87-118.
- ベンヤミン, W., 2000, 「歴史哲学テーゼ(歴史の概念について)」

- 大城立裕, 1977, 「沖縄3 戦跡」『朝日ジャーナル』19(3), 1977年1月21日号, 朝日新聞社: 56-62.
- 佐藤壯広, 2003, 「戦死者の記憶と表象をめぐる試論」(方法論懇話会編)『日本史の脱領域 多様性へのアプローチ』森話社: 172-87.
- 嶋津与志, 1974, 「沖縄戦はどう書かれたか」『沖縄思潮』第4号, 沖縄思潮編集委員会: 36-53.
- 新沖縄フォーラム編集運営委員会編, 1999, 『けーし風 (特集 検証・平和資料館問題)』25, 新沖縄フォーラム刊行会議.
- スターケン, M., 2004[1997], 『アメリカという記憶 ベトナム戦争、エイズ、記念碑的表象』(岩崎稔他訳) 未来社 (*Tangled memories: the Vietnam War, the AIDS epidemic, and the politics of remembering*, Berkeley: University of California Press.)
- 高橋哲哉, 2005a, 『靖国問題』ちくま新書.
- 高橋哲哉, 2005b, 『国家と犠牲』日本放送出版協会.
- 田中伸尚, 1998, 『さよなら、「国民」 記憶する「死者」の物語』一葉社.
- 富山一郎, 1995, 『戦場の記憶』日本経済評論社.
- 土江真樹子, 2005, 「平和の礎・沖縄戦を記憶すること」『前夜』第一期(3), 影書房: 122-126.
- 屋嘉比収, 2000, 「ガマが想起する沖縄戦の記憶」『現代思想』28(7), 青土社: 114-125.
- 屋嘉比収, 2002, 「戦没者追悼と“平和の礎”」『季刊戦争責任研究』36, 日本の戦争責任資料センター: 19-27.
- 靖国神社国営化反対沖縄キリスト者連絡会, 1983, 『戦争讃美に異議あり!—沖縄における慰霊塔碑文調査報告—』靖国神社国営化反対沖縄キリスト社連絡会.
- 安岡章太郎, 1968, 「オキナワ病について」『文藝春秋』46(5), 文藝春秋: 110-116.
- 米山リサ, 1998, 「記憶の未来化について」『ナショナル・ヒストリーを超えて』(小森陽一・高橋哲哉編) 東京大学出版会: 231-248.
- 米山リサ, 2005 [1999], 『広島 記憶のポリティクス』(小沢弘明他訳) 岩波書店 (*Hiroshima Traces: Time, Space, and the Dialectics of Memory*, Berkeley; Los Angeles: University of California Press.)
- 吉田裕, 1995, 『日本人の戦争観 戦後史のなかの変容』岩波書店.